

今回は、『天理教教典』の後篇(信仰篇)における「道」の用例について、出てくる順番に確認しておきたい。

「危い道」から「信心の道」へ

後篇の最初に「道」が出てくるのは、第6章「てびき」の次の文章である。

親神は、知らず識らずのうちに危い道にさまよいゆく子供たちを、いじらしと思召され、これに、真実の親を教え、陽気ぐらしの思召を伝えて、人間思案の心得違いを改めさせようと、身上や事情の上に、しるしを見せられる。(58頁)

そして、次の章には、「心の持ち方を正して、日々喜び勇んで生活するのが、信心の道である」(72頁)とある。すなわち、「危い道」から「信心の道」へ親神が「てびき」される。どちらの「道」も人の生き方を比喩的に表したものと思われるが、「日々喜び勇んで生活す」ことのできるように導かれるというのである。

「道の子」から「道の先達」へ

親神の「てびき」を受ける前の人は、「危い道にさまよいゆく子供たち」とされるのに対して、「信心の道」へ導かれた人は「道の子」と言われる。その用例が第7章から第9章に連続している(・で示した部分の表記は『教典』の通りである)。

- ・ 身上かしまの・かりもの理をよく思案し、…日々常々、胸のほこりの掃除を怠らず、いかなる場合にも、教祖ひながたを慕い、すべて親神にもたれて、人をたすける心で通るのが、道の子の心がけである。(72頁、第7章)
- ・ この中であつて、常に己が心を省みて、いかなることも親神の思わくと悟り、心を倒さずに、喜び勇んで明るく生活するのが、道の子の歩みである。(75頁、第8章「道すがら」)
- ・ 親神の類ない陽気普請に、よふぼくとして引き寄せられるのは、実に、道の子の幸である。(85頁、第9章)

これらの説明は、「信心の道」と同様で、「人をたすける心」で「喜び勇んで明るく生活す」ことが説かれる。また、「よふぼく」として引き寄せられるにあたり、身上や事情の「ていれ」をいただいても、「ただ道の花として喜びの中に受け取れる」(85頁)ようになるという。

「よふぼく」としての生き方、通り方については次のように「道」を用いて説かれている。

- ・ 身上を病んで苦しむ者に、さづけを取り次ぎ、せんすべない事情に悩む者に、教の理を取り次ぐのが、よふぼくの進む道である。(88頁)
- ・ まことに、この道は、心だすけの道である。(89頁)
- ・ よふぼくは、仮令、年限の理に浅い深いの相違があろうとも、教祖ひながたの道を慕い、ひたむきなたすけ一条の心から、あらゆる困難を乗り越え、温かい真心で、一すじにたすけの道に進むなら、何人でも、親神の守護を鮮かに頂くことが出来る。(89～90頁)

このように、「教祖ひながたの道」を慕うこと、特に「たすけ」が繰り返し強調されている。そうして通るところに、

- ・ よふぼくとしての丹精の効があらわれ、道を求めるものが、次第に相寄り相集つて、教会名称の理が許される。(90頁)
- ・ されば、会長の使命は、常に元を忘れずに、自ら進んで深く教の理を究め、心を治めて、道の先達となり、誠真実をもつて、人々を教え導くにある。(91頁)

と、信心の道、信仰の歩みを進める人々が集まり、教会が許され、

「道の子」は「道の先達」となる、と信心、信仰するもののプロセスが説かれている。

陽気ぐらしへの道

第10章では世界の治まりへと展開される。「たすけの道にいそしむ日々は、晴れやかな喜びに包まれ、湧き上る楽しさに満たされる」(92頁)が、「いか程長く道をたどつても、心が勇まらずに、いずんでいては、親神の心になかなぬ」(93頁)し、銘々勝手な道のたどり方、喜び方では親神の心になかない。そこで、「心を合わせ」て「互立て合い助け合う」ことが説かれる。

- ・ 一つに心合せるのは、一つの道の理に心を合せることで、この理を忘れる時は、銘々勝手の心に流れてしまう。(94頁)
 - ・ 人皆、相互に一つの道の理に心を合せ、互立て合い助け合うてこそ、陽気に勇んで生活して行ける。(94頁)
 - ・ 親神にもたれ、教祖を慕い、教の理を省みつつ、互に心を合せ助け合うて、陽気に生活すならば、ここに、たのもしい道が現れて、その喜びは世界にひろまつて行く。(95頁)
 - ・ 相互に助け合い、常にたゆまず、ひながたの道をたどり、陽気に勇んで、心のきりなしぶしんにいそしむならば、やがては、全人類の心も入れ替り、世は自と立て替つてくる。(96頁)
- 「一つの道の理」は、「教祖を慕い、教の理を省みつつ」とも言い換えられている。それは「ひながたの道」を慕うこととも重なるだろうが、それによって、「たのもしい道」が現れ、世界は立て替わるとされる。

このように「人類社会」の「矛盾を解き、撞著を治めるのが、たすけ一条のこの道である。これこそ、人類に真の心の支えを与え、光ある行手を教える唯一の道である」(97頁)と述べられて、「この親神の道が、人々の胸に正しく治められ、(中略)親神の待ち望まれる陽気づくめの世界になる時、この世ながらの限りない生気溢れる楽土が全うされる」(97～98頁)と説かれている。

第1章から第10章までのまとめ

98頁から『天理教教典』全体のまとめがなされている。ここから、「道」の用例を拾うと次のようになる。

- ・ 人間世界創造の思召を告げ、専らたすけ一条の道を宣べて、たすけづとめを教え、又、いき・てをどりのさづけによつて、一れつたすけを急ぎ込まれた。(98頁)
- ・ かくて、教祖が、教を宣べ、身を以てこれを証し、ひながたを示されたのも、親神の深い思わくによるものであつて、正に、教祖ひながたは、道の生命である。(98～99頁)
- ・ かくして進む成人の道すがらには、雨の日も風の日もある。(99頁)
- ・ そして、治められた誠真実は、自ら他に及び、一人の道は多くの人々の道となる。(99頁)
- ・ 即ち、道の子はよふぼくを志し、さづけの理を頂いて、たすけ一条にいそしみ、天の理を取り次ぎ、道の先達となる。(99頁)
- ・ それ(=陽気ぐらしの世界)は、親神の望まれる真の平和世界であり、これぞ、この道の目標である。道の子は、存命のまま導かれる教祖に抱かれ、ひたすら、世界人類の平和と幸福を祈念しつつ、たすけの道に(いやす)進む。(99～100頁)

ここだけで「道」を10回用いて全体がまとめられている。そして、最後も次のおうたで締めくくられている。

このみちハドふゆう事にをもうかな

このよをさめるしんぢつのみち (六一四)